

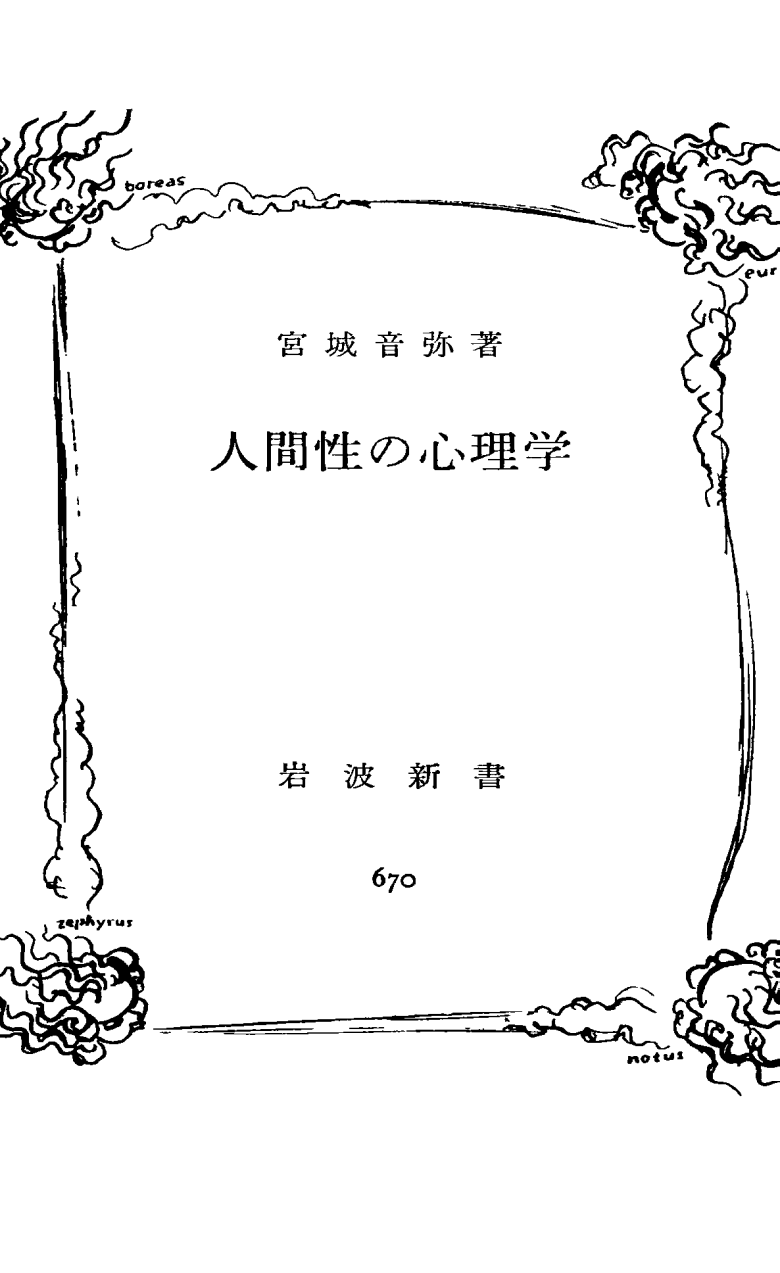
宮城音弥著

人間性の心理学



岩波新書

670



宮城音弥著

人間性の心理学

岩波新書

670

宮城音弥

1908年東京に生まれる
1931年京都大学文学部哲学科卒業
専攻—社会心理学, 異常心理学,
臨床心理学および精神医学
現在—東京工業大学名誉教授, 日
本大学教授
著書—「夢」第二版「精神分析入門」
「性格」「神秘の世界」「愛と
憎しみ」「心理学入門」第二版
「天才」(以上岩波新書)
「日本人の性格」「劣等感」
「日本人の生きがい」「日本
人とは何か」
岩波小辞典「心理学」第三版
訳書—ブロンデル「未開人の世界・
精神病者の世界」
カッシーラー「人間」

人間性の心理学

岩波新書(青版) 670

1968年2月20日 第1刷発行 ©

1975年10月20日 第11刷発行



¥ 230

著 者 みや ぎ おと や
 宮 城 音 弥

東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発 行 者 岩 波 雄 二 郎

東京都青梅市根ヶ布1-385
印 刷 者 白 井 倉 之 助

発 行 所 東京都千代田区一ツ橋2-5-5 株式会社 岩波書店
 〒101 電話 (03) 265-4111

落丁本・乱丁本はお取替いたします

精興社印刷・田中製本

序

本書で取り上げた諸問題こそ、人々が、まず心理学者に解答を要求するものではなからうか。心理学では、どう考えるかと質問したいことではなからうか。

だが、心理学者は黙して答えない。げんにわが国で出版されている数十冊の心理学概論をひらいてみよう。本書のなかで扱っている題目は、ほとんど見当らないのである。

実験心理学の発展はめざましい。刺激を変化させた場合に、その知覚がどう変るか、ネズミやサル学習はどのように行なわれるか、といったことが研究され、無数の業績が発表されている。研究結果は数字で処理され、小数点以下、何ケタまでも正確に計算されている。

しかしながら、愛と憎しみ、喜びと悲しみ、自信と不安、社交性と孤独、虚栄とごうまん……このような問題には、答えられていない。

「人間の研究は心理学だけの任務ではない。今日の心理学は実験と統計を用いる自然科学的心理学であって、人間性といった問題は主として哲学者またはモラリスト（人生論者）が扱うべ

きものだ」という人がある。

かつては、これらは哲学者やモラリストの守備範囲であった。彼らの直観はこの領域に貴重な遺産を残した。だが、いまや事態は変化した。哲学は自然科学における数学の地位を占め、それにあまざる傾向を示しているし、モラリストたちの分析は過去のものになってしまった。心理学は、哲学の遺産相続を開始すべき時期に到達したのである。そして、心理学の本質は、これらの伝統をひきついで——本書のなかで私が哲学者やモラリストの仕事を見捨てていないことに読者は気づかれるにちがいない——心の科学を樹立すること、私は疑わない。

私は実験心理学を尊重するし、実験的研究を無視することはできないと考えている。計量心理学はかぎやかしい成果をもたらしているし、統計的方法なくしては科学的心理学は発展しないと信じている。

ただ、実験と統計で扱えない分野があるのであって、これを捨て去って具体的な人間心理の解明はできない。

愛情の動物実験も企てられているが、嫉妬とか孤独とか疎外とかいったものについては、少なくとも現在では、実験的研究が不可能であるし、これらを数量的に処理するなどナンセンスという外はない。

科学的心理学の見地から——私は数量的でなければ科学的でないとは考えないし、実験的でなければ非科学的だとも信じてない——これらの諸問題を検討するために、私は病理法以外にはないと考える。これは、病的なものを土台にして正常な場合を明らかにしようとする方法であって、フランス心理学の伝統をなし、フロイト、マクドゥーガル、クレッチマーなども利用したものである。

従来、本書で扱っている諸問題に関心をもっていた私は、東京大学文学部でその一部を、教養学部で他の部分を講義し、東京教育大学の大学院で学生諸君の質問に答えた。これが本書の大筋となったのである。

本書を一種の人生論とみる人もあろう。しかし、今日までの、いわゆる人生論は、あまりにも文学的であり、詩的感覚で人々の心をとらえようとしたものであった。

たとえば、三木清の『人生論ノート』をひらいてみよう。嫉妬については書かれているが、「嫉妬は心の奥深く燃えるのがつねであるにもかかわらず、何等、内面性を知らぬ」「嫉妬とはすべて神の前において平等であることを知らぬ者の人間世界において平均化を求める傾向である」「嫉妬は出歩いて家を守らない……」といった叙述をしている。それはおよそ、明快さを欠く文章であるし、また、そのゆえに、深い所があるという印象を与えるのであろう。

もし、本書が人生論ならば「科学的人生論の試み」とでもいうべきものであって、従来の人生論とは質を異にする。

本書の各項は、一冊の本として発表することが考えられるし、ページ数の都合で余儀なく削除したテーマもあるが、類似の研究や著書を見出し得ない今日、このような形で世に問うことにした。心理学者、哲学者のみでなく諸方面の方々の批判を期待したい。

左記に掲げた本書の姉妹篇中で詳しく述べたことは、ことさらに省略した。「愛と憎しみについて」のような項目を欠いているのは、そのためである。

『心理学入門(第二版)』『夢』『精神分析入門』『愛と憎しみ』『性格』『神秘の世界』『天才』

なお、本書の出版もまた、『心理学入門(第二版)』『天才』に引きつづいて都築令子氏の御努力によって実現した。附記して謝意を表したい。

一九六七年十二月

宮城音弥

目次

序

幸福について……………1

幸福と幸福感(1) 快および喜び(4) 愛情(7)

価値について……………11

価値の多様性(11) 価値とは何か(13) 価値の種類(14)

価値とホメオスタシス(20) 価値とトランジスタシス(21)

人間とシンボル(24) 価値の形成(25) 価値間の矛盾(28)

価値観の類型(30)

喜びと悲しみについて……………33

感情について(33) 喜びのサルトル説(36) 悲しみの二
種(38) 積極的な悲しみ(40) 適応のサイン(42)

美について……………43

美と有用性(43) 美と崇高(47)

不安について……………51

不安とは何か(51) 不安と恐怖の間(55) 未来のイメージ
ジ(56) 劣等感と不安(57)

憂鬱について……………61

悲しみと憂鬱(61) ジャネの感情説(62) 憂鬱の原因(64)
憂鬱の現象(66) 憂鬱の種類(67)

倦怠について……………	69
疲労の意味(69) 飽き(70) 倦怠とは何か(71) 倦怠と 刺激(73) 流行とかけ(74)	
笑いと涙について……………	77
笑いの種類(77) 発散説(79) 優越感情説(80) 認知 説(82) ベルグソン説(86) フロイト説(89) 諸説の総 合(94) 涙の心理学(96)	
がんこについて……………	99
強氣のがんこ(99) 老人のがんこ(102) 意志薄弱のがん こ(102)	
うそについて……………	105
偽態と空話(105) 原始的うそ(107) 詐欺と逃避(110) 利 他的うそ・社交的うそ(111)	

虚栄心について……………	113
弱者の特性(113) 勝気の性格(115) 流行への欲求(116)	
偽善について……………	117
道徳とタブー(117) 抑圧と補償(119) 虚栄的偽善(122)	
貪欲について……………	125
貪欲者の心理(125) 経済的貪欲(129) 貪欲は生来的か(130)	
貪欲とケチ(131)	
はにかみとはじらいについて……………	133
はじらいと性(133) はじらいの原因(134) はにかみ(138)	
孤独について……………	141
共生欲求と逃避(141)	

自 殺 について……………	145
自殺の定義(145) 觀念的自殺(148) 感情的自殺(149) 意 志的自殺(152) 自殺の学説(154)	
人間疎外について……………	159
自我感とその喪失(159) 人間性喪失(161)	
自由意志について……………	165
自由と自由感(165) 理性による決定(168) 選択と抑圧(170) 責任能力(172) 価値の判定(174) 責任の原因(176)	
自我について……………	183
自我というもの(183) 自我の喪失(185) 靈魂というも の(186) 二重人格とトランス人格(187) 自我の成立(190)	

ホワイトとブラックの例(191) 自我の構造(194) 生理的
条件(195)

結

語・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・199

人名索引と参考文献

幸福について

幸福と幸福感

幸福とは、いったいなにか。

心理学では幸福をしばしば「精神的適応状態の意識的側面」と定義する。

人間は動物と同様に食物をとり、危険な敵から逃れ、異性を獲得する。同時に、このような適応に成功したとき、自分が適応しているという感じをもつ。適応状態を意識する。

これが幸福である。

人間の適応には自然的適応のほかに社会的適応があるから、社会的不適応を示す不安や罪の感じをもたないことも幸福の条件である。幸福が意識すなわち、感じられたものであるならば、それは幸福感到外ならないであろう。

一般の人にとって、適応感すなわち幸福感であるが、ときに「適応なき幸福感」も存在しな

いわけではない。それは、あたかも、見たり聞いたりする知覚が、現実の性質をつかむためであるのに、幻覚という「対象なき知覚」があるようなものであろう。

第一に、精神薄弱やある種の精神病では、不適応がありながら不適応感(欲求不満)はない。彼らは適応していかないのに不適応感がないのである。

第二に、生理的条件によって、爽快な気分が出現し、適応感をもつ者がある。それは病的な躁状態(もっとも典型的なものは躁鬱病の躁状態)において、きわめていちじるしく現われる。何もかも美しくみえ、すべてが輝いて感じられる。からだの病気の快復期にみられる愛情の感じ、人類愛的感情としての幸福感も同じく生理的条件によるものとみなしてもよいものである。第三に、宗教的・神秘的な法悦の状態——精神分裂病者にも類似の状態があることがあるが——も一種の幸福感である。これも、かならずしも適応を示すものではない。

いったい、幸福感のほかに、幸福というものの(実体)があるのか。幸福感を感じながら不幸な人、幸福感を感じないのに幸福な人が存在するのか。

まず、原始人は病気というものは、悪い気(という実体)が人間のなかに入り込むことだと考えたが、同様に、幸福という「もの」が「山のあなたの空遠く」住んでいると考える人もある。

つかみにくいものを、つかむことのできる「もの」とみなすわけであるが、このような実体は証明できないから、形而上学的（経験にうったえない）信仰とみなして心理学では扱わない。

つぎに、幸福感の原因となるものが、その社会、その時代によって、ほぼきまっているので、これを幸福と考えることができる。

青年の人生観についてわが国の心理学者が一九三〇年、一九四〇年、一九五〇年および一九六二年に行なった調査によると、一九六二年は圧倒的に「のんきに趣味に生きる」ことに価値をおいている者が以前より多い。

これは必ずしも、何を幸福と考えるか、を問題にしたものではないが、これによって、その時代の人たちが、どのようなものに対して幸福感を抱くかをうかがうことができ、その時代、その社会に一定した幸福感の原因があることを推測させる。

ある時代には「金があつて有名になった人」が幸福と考えられ、ある社会には「のんきに趣味に生きる」人間が幸福とみなされる。この考え方に支配されて、各個人の幸福観もきまる。それは個人を離れて存在しているもので、デュルケムが「集団表象」と称したものである。

ベンサムは「最大多数の最大幸福」を目標とするのがよい行為だと主張したが、個人個人によって幸福についての考えがちがうならば、一つの行為の結果が最大多数の最大幸福になるか

どうか、決めることはむずかしい。競馬に夢中になっている人の幸福と数学を愛好している者の幸福をどのようにして比較できようか。この行為をすることは、あの行為をするより三・五倍幸福を与えるなどということがどうして計算できるであらうか。

そこで、ペンサムという幸福は、どうしても右のような社会的な幸福ということになる。慰謝料請求などのとき、不幸や苦痛を金銭に換算するのは、幸福を個人によってちがったものと考えるかぎりナンセンスである。

快および喜び

社会的には幸福は右にのべたように考えられるとしても、われわれが日常、幸福と称するのは主観的で心理的な幸福感である。

この意味の幸福が「適応状態の主観的側面」だとするならば、幸福すなわち快であろうか。「快」はその物(たとえば食物)が適応に役立つことを示すサインであり、その行為(食べる)が適応をなさしめることを意味するからである。

幸福は「快」だという説はペンサムやミルのような功利主義者にとえられた。「最大多数の最大幸福」というとき、その幸福は「快」であった。

しかし、「快」があつて不幸な場合もあるし、苦痛があつて幸福な場合がある。マクドゥーガルが語っているように、事業に失敗して心をなぐさめようと音楽をきき、快感を味わうとき、